

【研究ノート】

ニュージーランド オークランドにおける
保育制度の現状に関する一考察
— ナショナル・カリキュラムと
教師の自主性・独立性に着目して—

新井 真実・川上 暁子*

*武蔵野大学 教育学部

One Consideration about the Current Situation of the
Childcare System in Auckland, New Zealand
— Focusing to National curriculum
and the Independency of the Teacher —

ARAI Mami and KAWAKAMI Akiko*

*Musashino University Faculty of Education

2020, the authors visited a childcare facility in Auckland, New Zealand. Based on this visit, this paper summarizes the childcare system and the actual situation in New Zealand. Chapter 2 summarizes the current state of the childcare system in Auckland, New Zealand, and Chapter 3 summarizes the outline and current status of each facility to which it is visited. In addition, Chapter 4 examines the current state of the childcare system in New Zealand, which has been visible through inspection. Development of the child is not taking in advance of the cognitive education and is that a heart and physical growth are accomplished generally. While children enjoy it by oneself and are active, as for the powerful way of the New Zealand childcare to aim for nature and an educational intention being accomplished, it can be a model for Japan.

Key words : Childcare system in New Zealand, Te Whāriki, Learning Story, The independency of the Teacher

キーワード : ニュージーランドの保育制度、テファリキ、ラーニングストーリー (学びの物語)、教師の自立性・独立性

1. はじめに

今日、国際化、情報化、科学技術の進展など、社会の各方面で様々な変化が進んでおり、今後、それらはますます拡大し、加速化することが予想される。子どもたちは、そのような激しく変化する社会の中で生きていくことになる。一方、教育や子どもたちの生活をめぐっては、知識の量を競うような教育に陥りがちであるといった指摘や、子どもたちの自然体験、家庭での生活体験などが不足し、豊かな心や生きるための知恵が身に付きにくいという指摘が聞かれる。このような状況を考慮し、これからの教育においては、子ども一人一人がこれからの社会の中で、生涯にわたって、心豊かに主体的、創造的に生きていくことができる資質や能力を育成することが求められるとされる。

英誌『エコノミスト』の調査部門 Economist Intelligence Unit (EIU) が2017年に発表したランキングによると、ニュージーランドは未来教育指数 (Education Future Skill) 世界1位となっている。技術や産業経済が激変する未来において、子どもたちが有望な人材として働き、変化する生活に対応できる力を備える教育がなされているかどうかを専門家らが分析した結果、未来的で総合的なニュージーランドの教育実績は高く評価された。未来教育指数で重視された教育方針は、「創造的かつ分析的なスキル」「起業家的なスキル」「リーダーシップスキル」「デジタル技術スキル」「グローバル意識と市民教育」の6つであり、まさに未来を切り開くスキルが挙げられている。

また、教育環境として分析された項目は、「国の政策方針」「教育者の義務・規則」「社会・経済の研究」といった、学校や教師個人の力量にとどまらず、国や社会の関わりも教育に必要なインフラとして整備されていると評価を受けた。その国の教育政策や、社会のジェンダー平等、多様性、ダイバーシティなども調査の対象となっている。その結果、1位にニュージーランド、2位カナダ、3位フィンランドと続いた。日本は7位でトップ10入りしているが、「社会経済

の研究」で順位が低く、特にジェンダー平等に関してスコアが低いことなどが指摘されている。一方、ニュージーランドは自然との共生、女性の活躍、多様性、ワークライフバランスなど全分野で高い評価を得て、総合1位になった。

さらに、OECD (経済協力開発機構) が3年ごとに調査している生徒の学習到達度調査 (PISA 2018年版) では、生徒のスコアは、読解・数学・科学の全分野で世界の平均スコアを上回っている。また、同じくOECDによれば、国の支出総額における教育への公的な支出総額の割合が高い国でもある。2019年のデータで日本は40カ国中36位だが、ニュージーランドはOECD加盟国の平均値を超えて4位である。(Education at a Glance 2019)

このように、施設や教師個人の力量と、国や社会の関わりとが一体となり、確かな教育効果を上げるニュージーランドの幼児教育の現状を知るとは、今日の日本において、新しい学力観に立つ教育の推進を図る上でも、有用なものと考えられる。

2. ニュージーランドにおける保育制度

(1) ニュージーランドの概要

ニュージーランドは南半球に位置し、北島と南島の二つの大きな島と周辺の島々からなる島国で、ポリネシア文化を受け継いだマオリ族が10世紀後半に発見し、1642年ヨーロッパ人の初渡来、1769年イギリス人による探検を経て、1840年イギリスの直轄植民地となった。その後、1907年にイギリス連邦自治領となり、事実上「独立」した。面積は日本の約4分の3の27万534平方キロメートルで、人口は約495万人とされている(2019年3月統計局)。首都は、北島の南端にあるウェリントンで、英語・マオリ語・ニュージーランド手話の3言語が国の公用語となっている。ニュージーランド国内に住む民族は、欧州系74%、マオリ系14.9%、太平洋島嶼国系7.4%、アジア系11.8%、その他1.7%という内訳になっており(2013年国勢調査)¹⁾、

民族構成から見てもわかるように、ニュージーランドは多くの民族を抱える多民族国家であると言える。

(2) ニュージーランドの保育制度の概要

ニュージーランドの保育制度は、1986年に幼保一元化を実施し、1996年に幼稚園・保育所の両方に共通した統一カリキュラム Te Whariki (テファリキ) が作成されたことで、世界的にも注目度が高い²⁾。ニュージーランドの乳幼児教育・保育の所轄官庁は Ministry of Education (教育省) であり、1986年にすべての保育機関が教育省の管轄下に置かれることとなった。世界的に見ても早い時期に幼保一元化が実施され、松井・瓜生(2010)によると、一元化の下で幼稚園や保育所の他、多様な施設や運営主体がその特徴や機能を保ちながら包括的な就学前保育制度を整えてきたことが特徴とされている³⁾。松川(2014)は、幼保一元化が実施された背景として、主流であった無償幼稚園の存在と多様な保育機関の存在の2点を挙げている。無償幼稚園はニュージーランドにおいて小学校入学準備教育として有効であると社会的に認知されていたこともあり、無償幼稚園を教育の場として位置付けて1978年に国レベルで確立され、発展してきた⁴⁾。また、多様な保育機関の存在については、1970年以降、保育所を求める声が社会的に高まり、幼稚園優遇策も相まって幼保格差も顕在化してきていたことから、国内のすべての保育機関を教育省に一元化することによって保育所についても教育の場であることを全面に出し、すべての保育サービスに平等に補助金が交付されることとなった⁵⁾。以下は、ニュージーランドで展開されている乳幼児教育・保育サービスの一覧である。

表1 ニュージーランドにおける乳幼児教育・保育サービス一覧^{6) 7)}

Teacher-led services (教師主導型乳幼児教育サービス)	①Kindergarten 幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・2歳から5歳までの子どもを受け入れる施設 ・午前と午後で異なる年齢の子どものセッションが設定されており、短時間保育の施設 ・幼稚園協会により運営されている ・教師は幼児教育の資格が必要とされる
	②Education and Care services 教育・保育サービス	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳から就学年齢までの子どもを受け入れる施設 ・1日セッションやフレキシブルプログラム等、比較的長時間の保育施設 ・私立もしくはコミュニティグループによって運営されている ・シュタイナーやモンテッソーリ等の教育哲学を取り入れた施設もある ・教師は幼児教育の資格が必要とされる
	③Home-based education and care 家庭教育・保育サービス	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳から5歳までの上限4人までの子どもを受け入れる施設 ・教師の自宅もしくは子どもの自宅にて教育・保育を行う ・教師は幼児教育の資格が必要とされ、かつ home-based service に所属していることが必須となる
Whānau-led services (ファナウ主導型サービス)	④Kohanga Reo コハンガレオ	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳から就学年齢までの子どもを受け入れる施設 ・マオリ文化や言語の環境で保育サービスを提供する ・通園する子どもたちの親、コミュニティの人たち

		ちで構成される ファナウと呼ば れるグループが 運営責任を担っ ている ・教師は幼児教 育の資格が必要 とされる
Parent-led services (保護者主導 型サービス)	⑤Playcentres プレイセンター	・0歳から就学 年齢までの子ど もを受け入れる 施設 ・親(保護者)や 家族が協力して 運営している ・子どもの親が 主体となって教 育プログラムを 管理・実施する のが特徴 ・教師は幼児教 育の資格が必要 とされる
	⑥Playgroups プレイグループ	・居住している コミュニティグ ループを中心と し、両親やボラン ティアにより運 営されている ・1日4時間を上 限とするセッシ ョンでコミュニ ティホール等の 場所で行われる
	⑦Nga Puna Kōhungahunga プナ・コフンガ フン	・マオリ文化に 即した保育を行 っているコミュニ ティを基盤に したプレイグ ループ
	⑧Pacific Island Playgroups 太平洋諸島プレイ グループ	・太平洋諸島の 言語と文化に即 した保育を行っ ているプレイグ ループ

(出典: Ministry of Education,
New Zealand)

ニュージーランドにおける乳幼児教育・保育
制度を支える基盤として「20 Hours ECE」があ
る。これは、3～5歳児を対象とした一日6時
間、週20時間まで保育料を無料にする制度の
ことを指す⁸⁾。この制度は2007年以降に導入さ
れた制度で、Early Childhood Education (ECE)
Services すなわち就学前教育サービスを利用
している場合は誰でも申し込むことができる。
この制度の導入には、保育所に子どもを預けな
い層に保育園の実情を知ってもらい、より活用

してもらいたい、という保育所普及のねらいが
ある。

ニュージーランドの乳幼児教育・保育のもう
一つの特徴は、本節の冒頭で述べた幼稚園・保
育所の両方に共通した統一カリキュラム Te
Whāriki が作成され、導入されていることであ
る。Te Whāriki とは、マオリ語で「織り上げた
敷物」という意味を持ち、その名前の通り4つ
の原理(保育する側がどのような理念に関わろ
うとするのかを示している)と5つの要素(それ
によって子どもたちに何が育まれるのかを示
している)とが編み込まれているものというイ
メージを示す、包括的で理念的なものとなっ
ている。1996年に作成されてからしばらくの間は
法的拘束力を持たなかったが、2008年からは遵
守が義務付けられるナショナル・カリキュラム
となっている⁹⁾。ニュージーランドでは、英語
の他にマオリ語も公用語となっていることから、
Te Whārikiにはマオリ語に訳されたものも発行
されており、Kōhanga Reo等のマオリの文化や
言語を対象とした教育カリキュラムも含まれて
いる。以下はTe Whārikiに示されている4つ
の原理と5つの要素をまとめたものである。

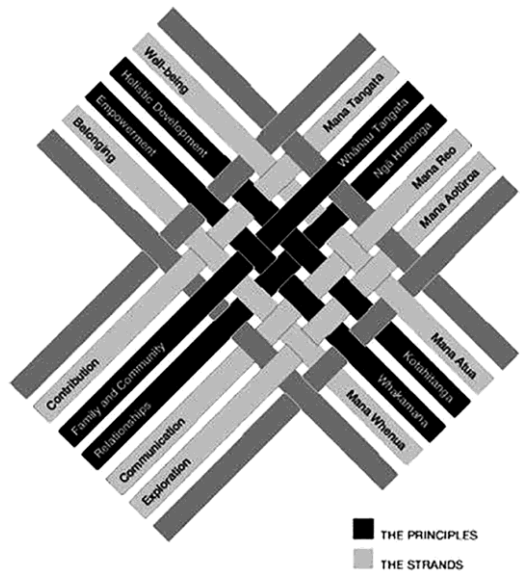


図1 Te Whāriki (テファリキ) の概念図

表 2 Te Whariki における 4 つの原理¹⁰⁾

Empowerment エンパワメント	The early childhood curriculum empowers the child to learn and grow. 幼児教育カリキュラムは、子どもに学び成長する力を与えるものである。
Holistic Development 全体的発達	The early childhood curriculum reflects the holistic way children learn and grow. 幼児教育カリキュラムは、子どもが学び成長している全体的なあり方を反映するものである。
Family and Community 家族とコミュニティ	The wider world of family and community is an integral part of the early childhood curriculum. 家族やコミュニティといった、より広い世界が、幼児教育カリキュラムにとって不可欠である。
Relationship 関係性	Children learn through responsive and reciprocal relationships with people. 子どもたちは、人々、場所、物との双方向の関係性を通じて学ぶ。

(出典: Ministry of Education,
New Zealand)

表 3 Te Whariki における 5 つの要素¹¹⁾

Well-being 心身の健康	The health and well-being of the children are protected and nurtured. 子どもの健康及び幸福感が守られ、育まれること。
Belonging 所属感	Children and their families feel a sense of belonging. 子どもたちやその家族が所属感を感じることができること。
Contribution 貢献	Opportunities for learning are equitable, and each child's contribution is valued. 学習の機会が平等であり、そして子どもたち一人一人の貢献が価値あるものとして認められること。
Communication コミュニケーション	The languages and symbols of their own and other cultures are promoted and protected. 自身の文化、他の文化の言語やシンボルが促され守られること。
Exploration 探究	The child learns through active exploration of the environment. 子どもは、環境の中で能動的な探究を通じて学ぶ。

(出典: Ministry of Education,
New Zealand)

Te Whariki は、ナショナル・カリキュラムが保育施設の自主性・独立性を脅かすのではないか、学校のカリキュラムが保育に下ろされて来るとのではないか、という危機感があった中で、

政府から委託を受けた当時ワイカト (Waikato) 大学で上級講師を務めていたヘレン・メイ (May, H) とマーガレット・カー (Carr, M) により作られた。二人は 5 年の歳月をかけ、保育諸団体と協議を重ね政府と粘り強く交渉する中で、政府からのトップダウン形式ではなく、実践の場からのボトムアップ形式でカリキュラムを練り上げた。Te Whariki (「織り上げた敷物」) には、これを基盤としながらも具体的な内容はそれぞれの保育施設が多様に織り上げていく、という意味が込められている。「心、身体、精神において健康であり、所属感や社会に価値ある貢献をすることのできる知識をもち、有能で自信に満ちた学び手、コミュニケーションの担い手として子どもたちが成長していくことを目指す」というビジョンの下に、①エンパワメント (Empowerment)、②全体的発達 (Holistic Development)、③家族とコミュニティ (Family and Community)、④関係性 (Relationship) の 4 つの原理と、①心身の健康 (Well-being)、②所属感 (Belonging)、③貢献 (Contribution)、④コミュニケーション (Communication)、⑤探求 (Exploration)、という子どもの発達と学びの分野である 5 つの領域が設定されている。

Te Whariki は、西欧のカリキュラムに支配的な伝統的発達段階アプローチとは大きく異なり、その基盤には子どもの学びを広い社会や文化の文脈の中で捉え、家族や地域社会の文化・価値観を保育の中に位置づけることを重視している。「何歳で何を教えなければならない」という構造的なカリキュラムではなく、一人ひとりの子どもの学びに焦点を当てたカリキュラムである。Te Whariki の考え方として、人生単位 (一生) で子どもの将来を考えるとという姿勢がある。例えば、一人の 2 歳の子どものように接するか、教えるのか、というよりも、この子の今後の一生の中で現在の 2 歳という時期がどのように過ごされるべきか、という考え方に立つ。その観点から、小学校の前段階としての「pre-school (学校前)」という呼び方、考え方に Te Whariki は相容れないものがある。あくまでも小学校のための準備の保育ではなく、人生を通

しての教育である、という考え方が根底にあると考えられる。

このように、ニュージーランドでは幼保一元化が実施されて以降、国家主導の手厚い乳幼児教育・保育サービスが提供され、独自のナショナル・カリキュラムの下、保護者主導の施設を含め、居住するコミュニティぐるみで教育や子育てに参加しているという状況を窺うことができる。また、様々な文化や言語等、異なる背景を持つ人々が共存する国であるため、所々に文化的もしくは言語的にマイノリティである民族への配慮が感じられるところが、ニュージーランドの乳幼児教育・保育制度の特徴と言えるだろう。

(3) ニュージーランドの乳幼児教育・保育の利用の現状

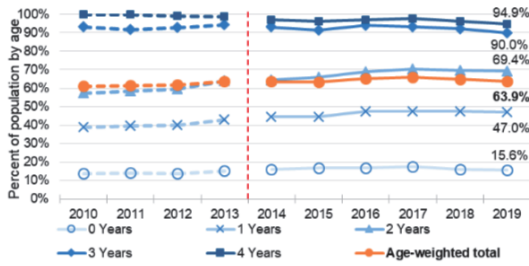
前節で述べた通り、ニュージーランドでは独自のナショナル・カリキュラムで乳幼児教育・保育が運営されており、様々な形で展開されている。以下は、ニュージーランドで乳幼児教育・保育サービスを受けている割合を表したものである(図2)。乳幼児教育・保育を統括するMinistry of Educationがまとめた資料から転載する。

図2を見ると、ニュージーランドにおける乳幼児教育・保育サービスの総利用率はごくわずかに減少傾向にあると分かる。Ministry of Educationもこの資料で総利用者数と総利用率が減少していることを「2018年の200,588人から2019年には198,923人に0.8%減少した。0~4歳のニュージーランドの子供の総利用率は63.9%で、2018年から0.9ポイント減少した。」のように述べている。年齢別で見ると利用者数で最も減少したのは3歳、4歳の子どもということが分かる。利用率に減少傾向が見られると言っても、このデータから、ニュージーランドでは、ほとんどの子どもたちが小学校入学前に何等かの乳幼児教育・保育サービスを受けていることがわかる。

さらに以下の図3は、ニュージーランドの子どもたちが、多様な保育機関の中からどの乳幼

児教育・保育サービスを利用しているかについてまとめたものである。尚このデータは、ECEサービスとKōhanga Reoのみを対象としたものである。図3からわかるように、現在最も利用されているサービスはEducation & Care(表1の分類で②)である。また、Home-based(表1の分類で③)は増加傾向から、横ばいの傾向が見られる。Kōhanga Reo(表1の分類で④)は安定して推移している。顕著な減少傾向にあるのがKidergarten(表1の分類で①)である。Kidergartenの利用者数について2014年を100%として実数で比較すると、2019年は88%となり、利用率が落ちていることがわかる。その背景としては、Kidergartenは保育時間が比較的に短いため、より長時間子どもを預けることができるサービスへと利用者がシフトしているのではないかと考えられる。またPlaycentre(表1の分類で⑤)も減少していることが分かる。

ニュージーランドは様々な民族が共存する多民族国家である。以下は民族別に乳幼児教育・保育サービスを利用している数を表したものである(図4)。図4を見ると、とりわけ、アジア系の伸びが顕著であり、マオリ系と太平洋島嶼国系の子どもたちの利用者数も伸びていることが示されている。それに対してヨーロッパ系は増加の傾向から、減少に転じていることが分かる。続けて図5は、民族別にどの乳幼児教育・保育サービスを利用しているか利用率を表したものである。どの民族もEducation & Careの利用率が高いことが分かる。Education & Careに続けて利用率が高いのは、マオリ族の子どもたちではKōhanga Reo(17%)、太平洋島嶼国系の子どもたちではHome-based(17%)である。Ministry of Educationがまとめた資料によれば、Kōhanga Reoを利用登録する子どもの内、94%をマオリ族が占めるということだった。乳幼児教育・保育サービスの利用において、それぞれの民族間で傾向があると考えられる。これに関する考察は今後の課題としたい。



1 The dashed red line indicates that direct numerical comparisons with earlier years cannot be made due to a change in how enrolments / attendances were collected, though trends can be inferred.

図 2 ニュージーランドにおける乳幼児教育・保育サービス利用率 (2018-2019)

(出典: Ministry of Education, New Zealand / Early Childhood Education Census 2019)

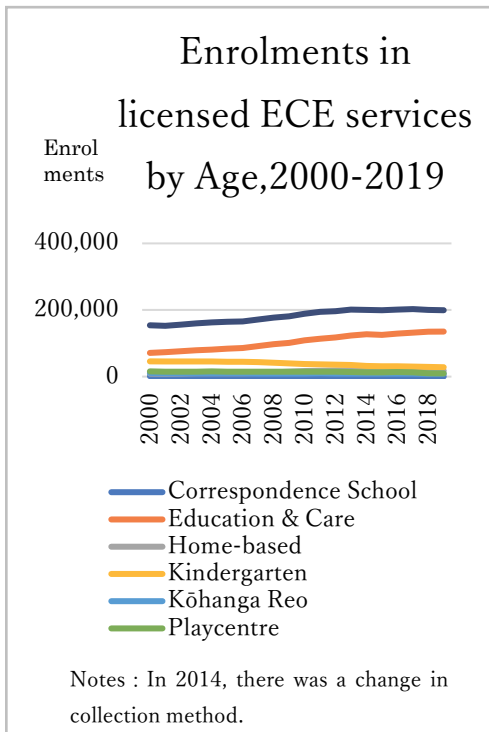


図 3 サービスタイプ別乳幼児教育・保育サービス利用者数

(出典: Ministry of Education, New Zealand / 筆者ら作成)

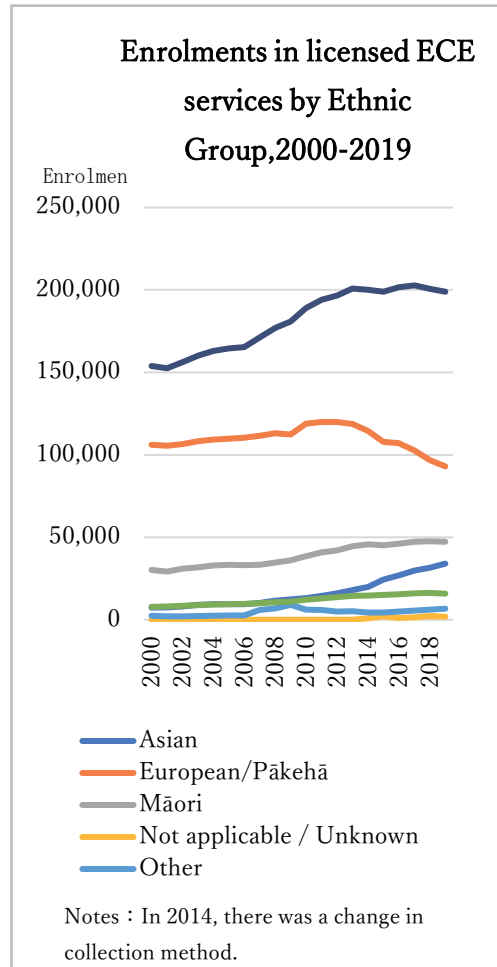


図 4 民族別乳幼児教育・保育サービス利用者数

(出典: Ministry of Education, New Zealand / 筆者ら作成)

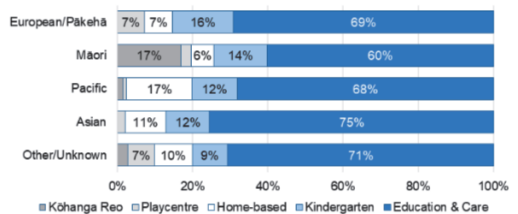


図 5 民族別乳幼児教育・保育サービス利用率

(出典: Ministry of Education, New Zealand / Early Childhood Education Census 2019)

3. ニュージーランド オークランド保育施設視察

2019年度、筆者らはニュージーランドのオークランドにて、保育施設の視察を行った。本章では、視察先の各施設の概要と現状について視察順にまとめる。

(1) Brightsparks Childcare Centre (Ms Susan Naidu) 40 Paramount Drive, Henderson, Auckland

表1の分類によると、②Education and Care services にあたる施設である。玄関ホールの壁面の掲示物にも示されている通り、この施設では Te Whāriki に基づきながら、レジオエミリア教育、およびキリスト教的価値観に基づいた全人教育を目指すという特徴がある(図6)。各クラスの入り口にも、担当する保育者の手によりフィロソフィーと取組みについての製作物が掲示されていた。クラスによってテーマや雰囲気異なる空間づくりからは、保育者の裁量が大きいことと、それがプラスに働いている印象を受けた。施設長によると、保育者はクラスに所属する子どものバックグラウンドと関連付けて、取り上げる行事(例えば、中国の春節)や装飾を考案することが多いとのことだった。日本人の保育者が1人在籍しており、保育者の出自も多様であるように見受けられた。

園庭の遊具は、木製によるものがほとんどで、一部はプラスチック製であった。砂場が中心となっており、大型の遊具は見受けられなかった。木製フェンスの内側には、子どもたちが持ち寄ったペットボトルのキャップを打ち付けて装飾がつけられていた(図7)。また、保護者の職場から廃材として提供されたという塩化ビニルパイプを長短織り交ぜて打ち付けることで、叩けば音色の異なる楽器として子どもたちに楽しまれていた。



図6 フィロソフィーの掲示



図7 ペットボトルのキャップによる装飾

(2) Laingholm Kindergarten (Head Teacher: Janice Dawson) 436A Huia Rd, Laingholm

表1の分類で、①Kindergartenにあたる施設である。サステイナビリティ事業を推進する Toimata 財団により認定された Enviroschool (エンバイロスクール)でもあり、環境教育に力を入れる園だった。その理念を表す壁面装飾として、母なる大地・万物の母を表す Papatūānuku のお腹の上に無数のプラスチックごみが山積している様子が描かれ、「Papatūānuku does not want plastic in her belly!」というメッセージが添えられていた。

屋外は、中央部全体が芝生の見晴らしのよい園庭となっており、子どもたちは裸足で駆け回ったり、傾斜をごろごろと転がって遊ぶ姿も見られた。屋外で目にするのができたエンバイロスクールらしい具体的な取組みとしては、職員が家庭から持ってきた古いバスタブを活用した「フェアリーガーデン」(図8)、子どもたちの食べ残しからコンポストで堆肥を作り野菜を育てるプロジェクト(図9)、廃プラスチックを積んだ高山をベースに土と植栽を重ねて巨人の顔をつくる「ジャイアントガーデンプラン」等があった。また植栽として、食すことのできるフルーツの木々が多く植えられ、子どもたちが



図8 バスタブのフェアリーガーデン



図9 食べ残しを堆肥にするコンポスト

より親しみをもって関わりやすくする教師の配慮を感じた。なお栽培に使う水に関しても、雨どいから貯水する仕組みが子どもたちの目に見えるように設置され、水不足も多いニュージーランドならではの環境教育につなげているとのことだった。また遊具として、古タイヤをカットしてつくったブランコ、電線コイルをそのまま活用した台などが使われていた。

(3) Learning CURVES Childcare Centre 11 Kinross St Blockhouse Bay, Auckland

表1の分類によると、②Education and Care services にあたる施設である。地域柄、アジア系をはじめとする多様な出自の子どもたちが利用しているとのことで、その事は子どもたちの外見からも見て取れた。年齢ごとに別れた部屋ではなく、0~5歳が同室で活動していた。活動内容により、乳児は別室に分ける時間もあるとのことだった(図10)。視察時、入園初日だという3ヶ月の乳児がいたが、保育者に抱かれて、4・5歳の子たちと一緒に部屋で行動していた。室内空間は装飾が少なく、全体的にシンプルであった。また、一般家庭の住居だった建物を改築していることもあって、家庭的な雰囲気があった。例えば、調理場はほぼ家庭のキッチンの仕様のままで、かつ子どもたちの活動場所とは地続きのところにあるため、料理する人の気配や匂いを、より濃密に感じられる空間となって



図10 子どもの視線に鏡が貼られた乳児の部屋

いた。園庭には屋根付きのスペースがあり、お絵かきのできる黒板や、レゴブロックなどが置かれていた(図 11)。滑り台などの大型遊具がいくつか置かれ、素材はプラスチック製のものが比較的多くみられた。



図 11 屋外のプレイスペース

(4) Hineteiwaiwa Kōhanga Reo (Ms Karen Liley)

23A Alten Rd, Grafton City Campus,
University of Auckland

表 1 では④に分類される施設で、マオリ文化や言語の環境で保育サービスを提供する施設である。ポフィリというマオリ族に伝統的な歓迎の儀式から、視察が始まった。本来はマオリ族の集会場正面にある神聖な空間に訪問者を迎えるための習わしだが、日常の様々な場面でも執り行われているという。互いに言葉を交わしながら関係を紡いでいき、来訪者が、歓迎する人々の中に溶け込むことで、この儀式は完了する。視察先においても、子どもたちは神妙な様子でスピーチ(保育者 1 名によるマオリ語、視察団の代表者による日本語のスピーチ)を聞き、マオリ語の歌(身体の動きが伴うもの)を披露してくれた。また著者ら視察団からは、日本語による手遊び歌『大きな栗の木の下で』を披露した。ポフィリの意義は、別々の集団を一体化させることにある。確かに儀式の前半は、内と外の境界線を感じさせるある種の緊張感を伴うものであったが、最後にホンギという挨拶(鼻と鼻をくっつける)がランダムに交わされ、

モーニングティーのジュースとお菓子が視察団に振舞われると、一体感を肌で感じる事ができた。保育者によると、客人を迎え入れることは子どもたちにとって大変重要な意味があるとのことだった。儀式の緊張感の中でじっと集中することや、異文化(日本語・日本の歌・日本人)を見聞きする体験でもあるという。また、マオリは歌をたくさん歌う部族であり、保育中の歌にもその文化を伝える意味があると説明があった。実際、モーニングティーの間にも、保育者は子どもたちの背中越しに歌を歌っていた。

室内は、天井が高く細かい区切りがないため開放感があり、光や風を存分に感じられる空間となっていた。園内ではマオリ族の文化に基づき、裸足で生活するようになっており、保育者も子どもたちも、屋内外問わず裸足で行き来していた。園庭に出ると、既成の遊具は比較的少ない印象であった(図 12)。自然な起伏や石、木々などがそのまま残された環境で、子どもたちは木片を杖にして傾斜を登ったり(図 13)、穴を掘ったり、落ちていた布を遊具に掛けてトンネルをつくったりして、各々に遊びを創造し楽しんでた。また、テラスに置かれたクッションやソファで一人で過ごしたり、少人数で集まってゲームをする子どもたちの姿もみられた。マオリ族に出自のある子どもが多く利用しているが、マオリ文化や言語の環境で保育・教育がなされることを求めて、マオリ族に出自がなくてもコハンガレオを選ぶ場合があるという。保育者の出自も多様に感じられたので、1人の



図 12 既成の遊具が少ない屋外

保育者に聞いたところ、その保育者自身はヨーロッパ系で、マオリ族の伝統である刺青をしている保育者がマオリであると教えてくれた。



図 13 自然な起伏が活かされた園庭

(5) Matipo Primary School (Principal: Ms Linley Myers)

63B Matipo Road, Te Atatu

日本の小学校に当たる Primary School を視察した。ニュージーランドの小学校は、5歳の誕生日を迎えると学年「0」として入学することができ、ほとんどの子どもが誕生日の翌日に入学する(そのため「入学式」はない)。学期(ターム)は4学期制で、1学期は1月末～2月上旬から始まる。したがって、子どもたちは満6歳を迎える年に揃って1学年に進級し、5学年までを過ごしたあと、日本では中学校に当たる Intermediate School に進学する。

学校の敷地は大変広大で、事務室棟や教室棟、講堂など平屋の建物が、いくつにも分かれ配置されていた。演劇教育のためのスタジオもあり、室内には段差があって壇上をステージとすることで演劇ホールとしても使える空間になっており、楽器や衣装・小道具なども多数保管されていた。建物と建物の間には整えられた球技用のコートや菜園、花壇もあるが、原生の大きな木々

が生い茂る庭もある。屋外の至る所に、教員や子どもたちの手によるアート作品を見ることができた。いずれもコミュニティ・アートの色合いが強いもので、ニュージーランドの文化や自然と関連づける教師の意図が感じられた。例えば、マオリ族の伝統模様である「コルー(Koru)」

(シダの芽の渦巻きをモチーフとしたデザイン)を題材につくった子どもたちによる粘土細工を、渡り廊下の壁面に装飾タイルのように張り付けていた。他に、子どもたちが持ち寄った色とりどりのビーチサンダル(片方を失くしていたり、サイズが小さくなって履かなくなったもの)を大木の幹に打ち付けてつくった作品(図14)があったが、これは廃材利用のプロジェクトであると同時に、“ビーチサンダルがニュージーランド発祥である”(諸説あり)という認識も背景にあるのだと、教師の一人が教えてくれた。



図 14 ビーチサンダルによる作品

学年「0」の教室を視察した。準備された様々な衣装やお面を身に着け「変身ごっこ」をしているグループや、玩具の工具セットを使って遊んでいるグループがあった。思い思いに活動する子どもたちの傍らには教師がいて、子どもたち同士の関わりに目を配っていた(図15)。少し上の学年のクラスに移ると、屋外で子ども

たちがいくつかのグループに分かれ、水遊びをしているようだった。近づいてみると、グループ毎に行っている内容が違う。あるグループは複数のパイプ状の器具を組み合わせて、水の通り道をどう作るか相談しながら活動していた。またあるグループは、大き目のポリ容器に水と土を入れ、傾けたりこぼしたりしながら、分離の様子に注目しているようであった。教師に尋ねたところ、「水」をテーマにした「ディスカバリータイム」という時間であるとのことだった。

上級学年の授業では、国語が行われていた。あらかじめ聞いていた通りの少人数教育で、15～20名のクラスだった。全体指導を行わず、レベル別に4つのグループに分かれて、ノートPCや書籍を活用し各々の課題を行っているところだった。教師があらかじめレベルに応じた課題を与え、グループ単位で自主的に取り組ませるといふ。ニュージーランドでは全国で統一された教科書はなく、各教師が作成した配布物に沿って授業が進められる。担当の教師に、グループごとの課題を作成することは大変ではないかと聞いたところ、大変だという率直な返答だった。土日の時間を活用して作成し、あとは何年もやっている課題のストックができるからということだった。

マオリのクラスも見学した。室内の掲示もマオリ語で書かれており、授業中の教師の発言、子ども同士のやり取りも全てマオリ語で行われ、ここにもKōhanga Reoにみられるようなマオリ文化の尊重がみてとれた。



図15 学年「0」の授業の様子

(6) Japanese kindergarten (Principal: Ms. Naomi Brown)

38 Pembroke Crescent, Glendowie, Auckland

「ニュージーランドの幼児教育課程において日本語環境を与える」という特徴をもって運営される、Ministry of Educationに認可されたニュージーランド国内で唯一の日本人幼稚園である。対象を日本にルーツがある、もしくは日本で生育歴を持ち日本語を話す子どもたち、としている。過去に、全く日本に出自のない子どもで、幼稚園に来る時間以外の普通の生活に日本語を話す聞く環境を持つという条件で、受け入れた例もあるという。1日に8人を受け入れ、利用は原則週1日である。平日の5日間運営されており、週に40人の子どもを受け入れている。室内に置かれた絵本や玩具はすべて日本製のものであり、子ども向けテレビ番組のキャラクターのビニール人形などもあった。壁面装飾の動物を擬人化した平面的なイラスト、掲示された子どもたちの造形作品（折り紙のひな人形）等、日本で馴染みのある保育室の様子に極めて近い印象を持った（図16）。また、保育者が『ネズミの嫁入り』のエプロンシアターを、子どもたちを集めて実践している様子があった。園庭には砂場がある他、遊具は比較的コンパクトなプラスチック製のものも配置されていた（図17）。



図16 日本人幼稚園の保育室



図 17 日本人幼稚園の園庭

4. 結果及び考察

(1) ニュージーランドにおける保育施設の現状

Te Whariki は先述の通り、理念的なカリキュラムである。ここではカリキュラムの定義も、一般的に日本で考えられているものよりは広義の意味を持つ。Te Whariki は子どもたちを、4つの原則と5つの要素を編むように、社会文化的背景に則して育てていくという内容となっている。何歳で何ができるようになるといった目標、行わなければならない教育内容は、一切ない。一方で、教えるはならないという内容も含んでいない。したがって各施設ではレジオ Emilia 教育、モンテッソーリ教育といった教育哲学や、宗教的価値観も尊重している。実際、現地の教育機関では Te Whariki をカリキュラムとしながらも、独自の哲学に基づいた教育が行われていた。

Te Whariki はその民主的な出自、理念の崇高さから賛辞されることが多い。国際的にも OECD をはじめ、Te Whariki は先駆的だと受け止められている。また、教師たちにとっても独自の教育環境を「編み上げて」いく裁量の大きさから、概ね肯定的に受け入れられていることが、視察での聞きとりから推察された。制定から 24 年経ち、現在働いている教師の多くが Te Whariki を学び教師になっている。この間、幼児教育の教師が不足していたという事情もあり、

幼児教育の教師は移民を積極的に受け入れる職業の 1 つでもあった。それゆえ幼児教育の教師は移民の割合が高く（視察先においても、インド系やアジア系の教師たちが活躍する様子がみられた）、自身や同僚が移民であることの多い教師自身にとっても、Te Whariki の内容は魅力を感じるものと推察される。

一方で、教師の Te Whariki の理解が多様すぎる、教師が義務付けられているアセスメント記録「学びの物語 (Learning Story)」の書き方に個人差がありすぎる、といった点も指摘できる。Te Whariki が具体性に欠けるカリキュラムである限り、施設によるばらつき、教師の実力によって左右される部分が大きいことは推察できる。Learning Story は従来型の「誰が何をできるようになった」といった目標達成型の評価ではなく、Te Whariki が取り上げるような理念を意識しながら、子どものあるがままの状態を描写していくような手法である。この手法には時間もかかるが、Learning Story は教師だけでなく親が子どもの成長に関与するに際しても重要なものとされている。現在、子どもたちの記録は文章だけでなく、状況が分かる写真も使われることが多い。現場では、教師がデジタルカメラを持って子どもの様子を撮影している姿がよく見られた。また、視察における聞き取り調査によると、Learning Story を書く時間は、幼稚園で 1 日 1.5~2 時間程度、保育園では 1 週間に 1~2 時間程度であった。どの保育施設も効率化を図る為かフォーマットが似通っており、形骸化する危険性ははらむようにも感じた。

ニュージーランドの幼児教育に関して、多額の税金が使われているにもかかわらず、一体子どもたちが何を学んでいるのか分からないといった批判¹²⁾もある (Blaklock, 2013)。多額の税金を使いながら説明責任に欠けるというものである。そもそも Te Whariki が教育の結果を測るためではなく、実際に目の前に存在している多様な文化的な背景、教育哲学、子どもたちに対する幼児教育を網羅しようとした出自を考えれば、成果の可視化は難しい側面ともいえるだろう。乳幼児保育は小学校以降の教育とは異

なり、統一学力テストのような教育の成果測定はできず、施設での遊びなどの生活の中で、子ども一人ひとりの発達に沿って、サービスが提供されているため、測定方法、評価内容、評価指標などが分かりづらく、どの点をもって保育の質が確保されているのか議論の分かれるところである。

(2) 今日の保育・幼児教育において Te Whāriki がもつ可能性

筆者らが専門とする、幼児の身体教育・身体表現の観点から、例えば園庭の環境に注目したとき、日本とニュージーランドとでは圧倒的な違いがある。存分に駆け回ることのできる広々とした土地、石や木の根を活用して登ることのできる自然な起伏、生い茂る多種多様な木々が作り出す奥行きや陰影などが、代表的な例である。そういった恵まれた環境によって、子どもたちは大いに感性を刺激され、自然に多様な動きを引き出され、獲得していくと考えられる。それは確かに、ニュージーランド特有の広大な自然に裏付けられたものでもあるが、そこには確かな理念と、そこに立つ教師の意図がある。

例えば、屋内から園庭へとつづくデッキや渡り廊下には、しばしばソファやクッション等が置かれており、子どもたちには、ただ“活動的に”体を動かすばかりではなく、のんびりとくつろいだり、次の活動に向け思索を巡らせる自由も与えられていることに気付く。また、無造作に置かれた、布、木片、粘土、塩化ビニル管（廃材）などの様々なマテリアルは、子どもたちに活動を強制することも制限することもなく、日々新しい発見を促し、飽きることがない。Kōhanga Reo の園庭にしても、エンバイロスタイルの遊具にしても、共通して言えることは、常に子ども自身が想像力を巡らせ、自分らしい遊びや学びを創造するための「余白」が残されているということだ。そこに、Te Whāriki が実現しようとするビジョン「心、身体、精神において健康であり、所属感や社会に価値ある貢献をすることのできる知識をもち、有能で自信に満ちた学び手、コミュニケーションの担い手と

して子どもたちが成長していくことを目指す」という姿勢が表れているのではないかと。幼児教育を経て小学校に進学した子どもたちの、主体的で力強い学びの姿を見ることで、一層その効果を感じた。このようなニュージーランドの教育を見るとき、近年の日本の身体教育の中でしばしば問題とされる、動き方・遊び方を規定し過ぎて、禁止事項が多過ぎるといった点を、改めて省みることもなった。

制定当初先駆的であり、今なお国際的に先駆的なカリキュラムは、国内では国際競争力や、説明責任といった現代的な課題にも直面している。Te Whāriki がこのまま発展を遂げ未来につながっていくのか、あるいはより教育の結果が見えるような形で子どもたちを効果的に育てる方向に傾いていくのか、注視されている。

5. まとめ

ニュージーランドは、イギリス人とマオリ人の二文化国家であり、その上で南太平洋諸国やアジア、ヨーロッパなど世界から移民を受け入れ、異なる 200 の言語を話す人々が暮らしている。ニュージーランドの保育は、「子ども個人の能力を上げる」という西洋的な考えに傾倒せず、「自然の一部である人間。子どもの生まれた環境、家庭、祖先、言葉、文化、マナ（人や物に宿っているとされる力の源）を大事にする」という南太平洋的な考えを取り込むことで、大きく舵を切った。個人の幸せや輝きが、社会に価値ある貢献をもたらすという考えは、日本の保育・幼児教育にとっても学べることが多いのではないかと。

改めて、子どもの成長とは、知育の先取りではなく、心と身体の成長が総合的に遂げられることである。子どもたちが自ら楽しんで活動する内に、自然と教育的意図が達成されることを目標とするニュージーランドの保育の力強いあり方は、日本にとってもモデルとなり得るものである。特に、子どもたちの豊かな心や生きる知恵を育むために必要な、自然体験や家庭的な

生活体験の不足を、保育・教育の中でいかにしてカバーしていけるか。そのヒントを、ニュージーランドの保育者や教師の関わりの中に見出すことができる。つまり、ナショナル・カリキュラムを踏まえつつ、そこに縛られることなく、保育者自身が自主性と独立性をもって、子どもとの関わりを豊かにデザインできること。それこそが、子どもたちが生涯に渡り、主体的、創造的に生きていくための資質や能力を育成することにつながるものと考えられる。

謝 辞

本稿執筆に当たり、ニュージーランド オークランドにおける視察先として、Brightsparks Childcare Centre、Laingholm Kindergarten、Learning CURVES Childcare Centre、HineteiwaiwaKōhanga Reo、Matipo Primary School、Japanese kindergarten の子どもたち、先生方、並びに関係者の皆さまには多大なご協力をいただきました。ここに深く御礼申し上げます。

註

- 1) 複数回答者（混血等により、複数の民族を選択したものと思われる）が存在するため、各民族の合計は 100% を超える。
- 2) 松井由佳・瓜生淑子 (2010) 「ニュージーランドにおける乳幼児保育制度—幼保一元化のもとでの現状とそこからの示唆—」『奈良教育大学紀要』第 59 巻, p. 56
- 3) 松井由佳・瓜生淑子 (2010) 「ニュージーランドにおける乳幼児保育制度—幼保一元化のもとでの現状とそこからの示唆—」『奈良教育大学紀要』第 59 巻, pp. 56~57
- 4) 松川由紀子 (2014) 「ニュージーランドの保育制度改革と現在」『幼児教育史研究』第 9 号, pp. 67~68
- 5) 松川由紀子 (2014) 「ニュージーランドの保育制度改革と現在」『幼児教育史研究』第 9 号, pp. 68~69
- 6) Ministry of Education, New Zealand HP “Different kinds of early childhood education” のページを筆者らが翻訳し表にまとめた。
- 7) ①~⑧の通し番号は筆者らによる。
- 8) ニュージーランドの保育園では原則、5 歳の誕生日をもって卒園し、次週から小学校に通う。しかし個人差によりそのまま在園する場合もある。したがってこれは実質的には 3 歳児と 4 歳児に適用される制度である。発足当初は制度導入園も少なかったが徐々に浸透し、今では全国規模で定着した。
- 9) 松井由佳・瓜生淑子 (2010) 「ニュージーランドにおける乳幼児保育制度—幼保一元化のもとでの現状とそこからの示唆—」『奈良教育大学紀要』第 59 巻, p. 60
- 10) Ministry of Education, New Zealand HP “Different kinds of early childhood education” のページを筆者らが翻訳し表にまとめた。

- 11) Ministry of Education, New Zealand HP
“Different kinds of early childhood education” のページを筆者らが翻訳し表にまとめた。
- 12) Blaiklock, K. (2013). What are children learning in early childhood education in New Zealand?.
Vol 38.2, Australasian Journal of Early Childhood.

主要参考文献

鈴木佐喜子「ニュージーランド-「学びの物語」と保育の質向上の取り組み-」, 泉千勢『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか—子どもの豊かな育ちを保障するために—』 p. 239-264, ミネルヴァ書房, 2017年

(2020年3月31日受稿)